

戦後80年

近代戦争と日出

— 徴兵制成立以後 —

主催 日出町歴史資料館・帆足萬里記念館 日出町教育委員会社会教育課

2025 6/24(火)

2025 10/19(日)

I 徴兵制度の成立

国民に課せられた兵役の義務

慶応3(1867)年12月9日、明治維新政府は王政復古の発令を発し、天皇を中心とした新政府の樹立を宣言しました。そして翌年1月には鳥羽・伏見の戦いが勃発し、薩長軍を中心とする新政府軍と旧幕府軍との内戦である戊辰戦争が始まりました。

徳川幕府の士農工商という身分制社会下において軍事は主に士族(武士)たちが担っていましたが、政府は国民を徴兵して政府直属の軍隊を創設することを考えていました。そのため、西欧列強の徴兵制度を参考にして政府直轄軍の創設を計画しました。

明治5(1872)年11月28日、明治天皇は徴兵の詔書を発し、それを受けて当時の最高官庁である太政官が徴兵の告諭を出しました。これによって、国民皆兵を原則とする徴兵制度の導入が、正式に国の方針として打ち出されました。明治6(1873)年1月10日には徴兵の詔書と徴兵告諭に基づき徴兵制が定められ、満20歳以上の男子が兵役につくことになりました。その一方でこの徴兵制の規定には兵役免除の条項があり、官吏、戸主やその相続者、高額な代人料を支払える富裕層、などがその対象でした。

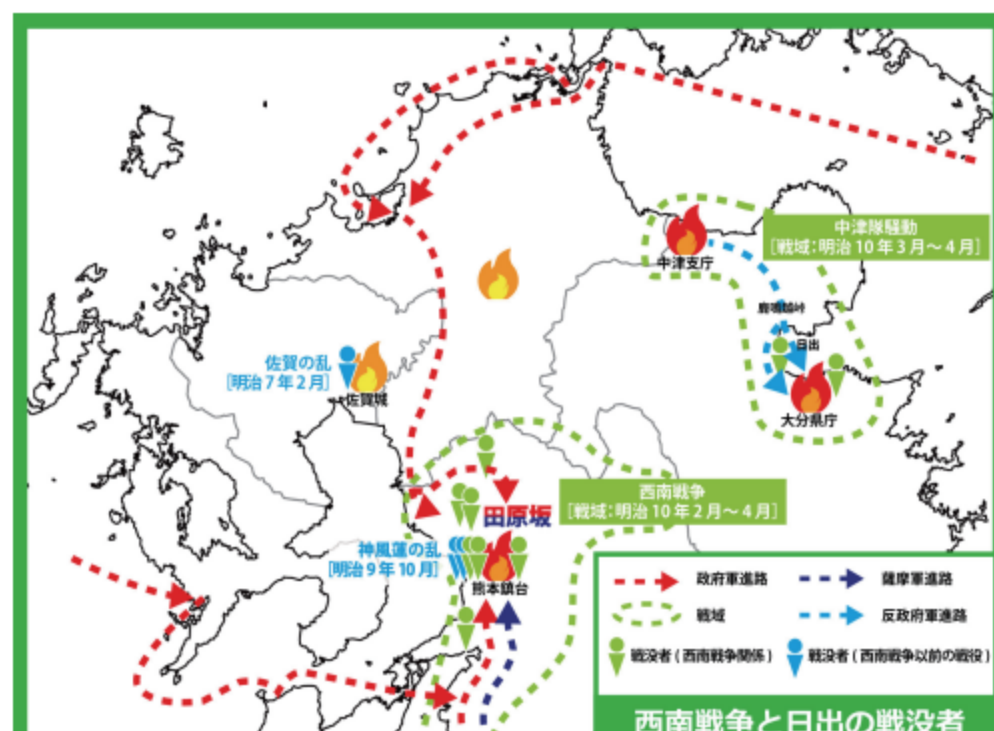
このような徴兵令に対して、国民は各地で徴兵反対一揆を起こしました。また、国民の間で徴兵を忌避する風潮が起こったり、「徴兵よけ」信仰が広まったりしたと言われています。

II 内乱からはじまる近代戦

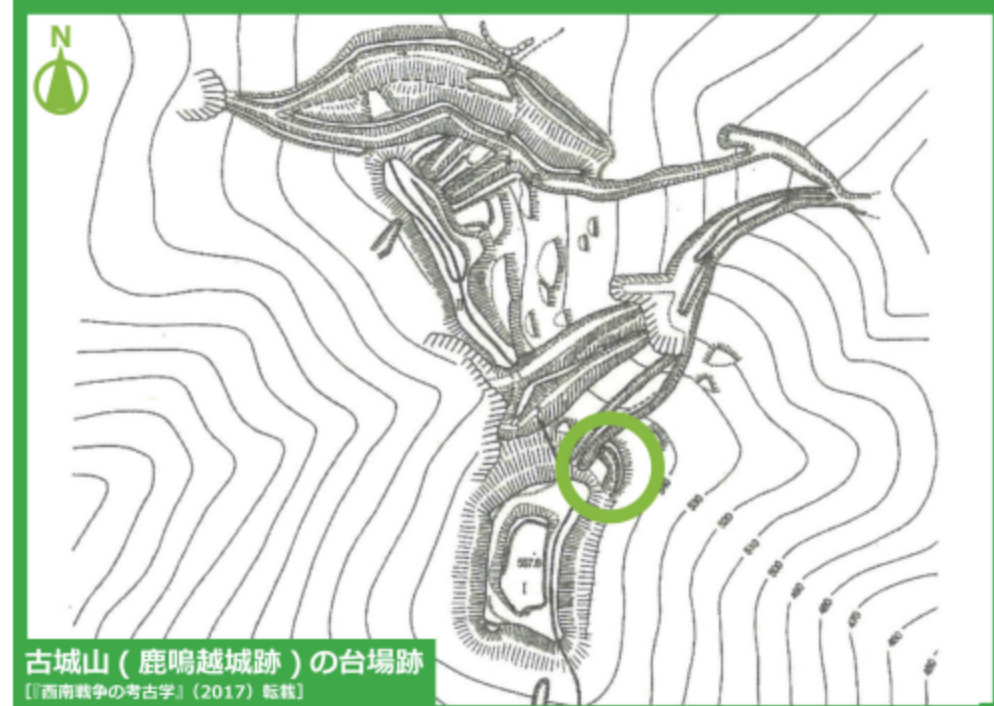
士族反乱

明治6(1873)年の秩禄処分と廃刀令によって特権を奪われた士族たちは藩閥政府に対する不満をつのらせ各地で反乱を起こしました。この士族たちとの内乱に徴兵されたばかりの政府軍が初めて投入されました。

その代表的反乱として明治7(1874)年2月、江藤新平を首領とした佐賀の乱(佐賀戦争)が起こりました。『佐賀襍報・佐賀戦記』によればこの政府軍の中に日出藩士族の上田亀太郎が参戦しており、2月17日の佐賀城での戦いで戦死したことが記されています。佐賀の乱平定後、政府は東京九段坂上の招魂社(後の靖国神社)にて佐賀の乱における戦死者の弔う招魂祭を行っています。『縣治概畧』



西南戦争と日出の戦死者



古城山(鹿鳴越城跡)の台場跡
『西南戦争の考古学』(2017) 転載

第十九條 日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應シ均ク文武官ニ任セラル
第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ
第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ
第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ
第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ
第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ
第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ
第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ
第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ
第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ

大日本帝国憲法

(国立国会図書館デジタルコレクション)

徴兵ノ編成等ニハ
徴兵ノ編成等ニハ
徴兵ノ編成等ニハ
徴兵ノ編成等ニハ
徴兵ノ編成等ニハ
徴兵ノ編成等ニハ
徴兵ノ編成等ニハ
徴兵ノ編成等ニハ
徴兵ノ編成等ニハ
徴兵ノ編成等ニハ

改訂徴兵令

(国立公文書館デジタルアーカイブ)

第六には佐賀の乱の戦死者を招魂社へ合祀して毎年 1 月 27 日の祭典にて慰霊していくという旨を記した陸軍省の通達が収録されています。

また、最大の反乱となった明治 10（1877）年の西南戦争には、日出も巻き込まれました。同年 3 月 31 日、増田宋太郎ら中津隊は西郷軍に呼応して中津にて兵を挙げました。そして、旧府内城内にあった大分県庁を襲撃するために豊前道を南下しました。4 月 1 日にその途中にある鹿鳴越峠にて政府の巡査隊との戦いが起こりました。その時に巡査隊によって築かれたと思われる台場の跡が古城山（鹿鳴越城跡）で確認されています。

Ⅲ 対外戦への広がり 近代戦争をめぐる世界情勢

明治政府が成立した 19 世紀、世界は西欧列強による植民地の争奪という帝国主義の時代を迎えていました。そのような国際情勢下での日本の最大の課題は、不平等条約の改正と国際的地位の向上でした。

政府は条約改正のために、明治 4（1871）年末に岩倉具視らの使節団を欧米に派遣しました。しかし、交渉は失敗に終わり、国力のない日本は列強国に対等には扱われない現実を思い知らされます。使節団は欧米社会の発展を直接見聞きすることによって、欧米に追いつくべく近代化を進め富国強兵策に邁進する覚悟を固めていくのです。

その結果日本は清国やロシアとの戦争に勝利し、国際社会における地位を高め、結果として明治 44（1911）年に米国との条約改正を成功させ、念願の関税自主権の回復に漕ぎつけたのです。

列強の一員を自認するようになった日本は、あえて第 1 次世界大戦に参戦し主戦地からは遠い山東半島や南洋諸島のドイツ領に派兵し、戦勝国として山東半島の旧ドイツ権益の継承や、赤道以北の旧ドイツ領南洋諸島の委任統治権を得、大正 9（1920）年に成立した国際連盟では常任理事国に就任し、国際的な地位を確立させたのです。

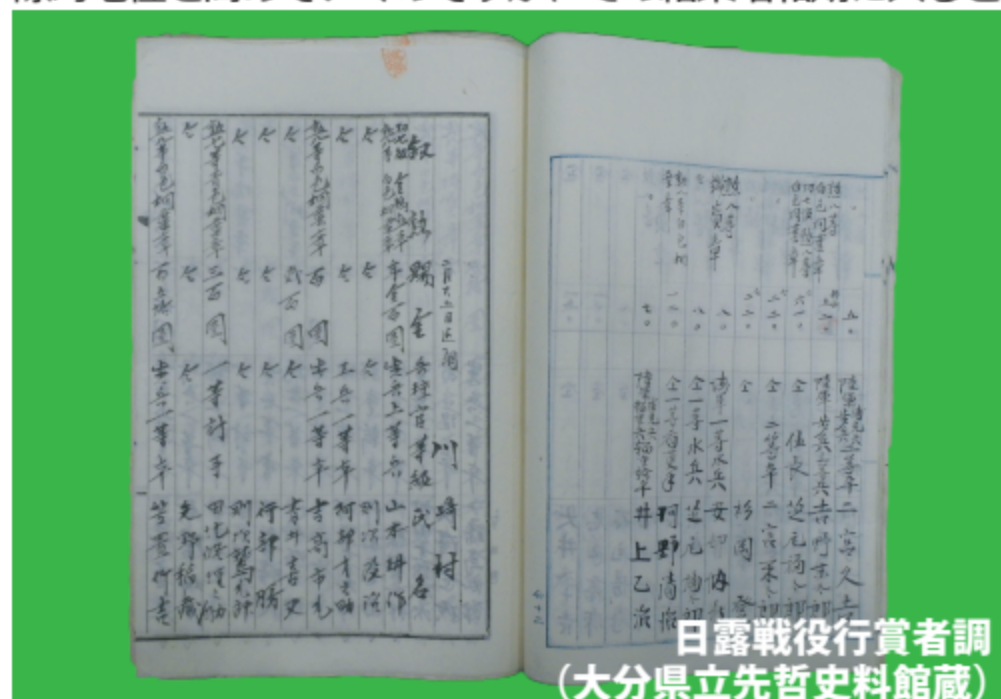
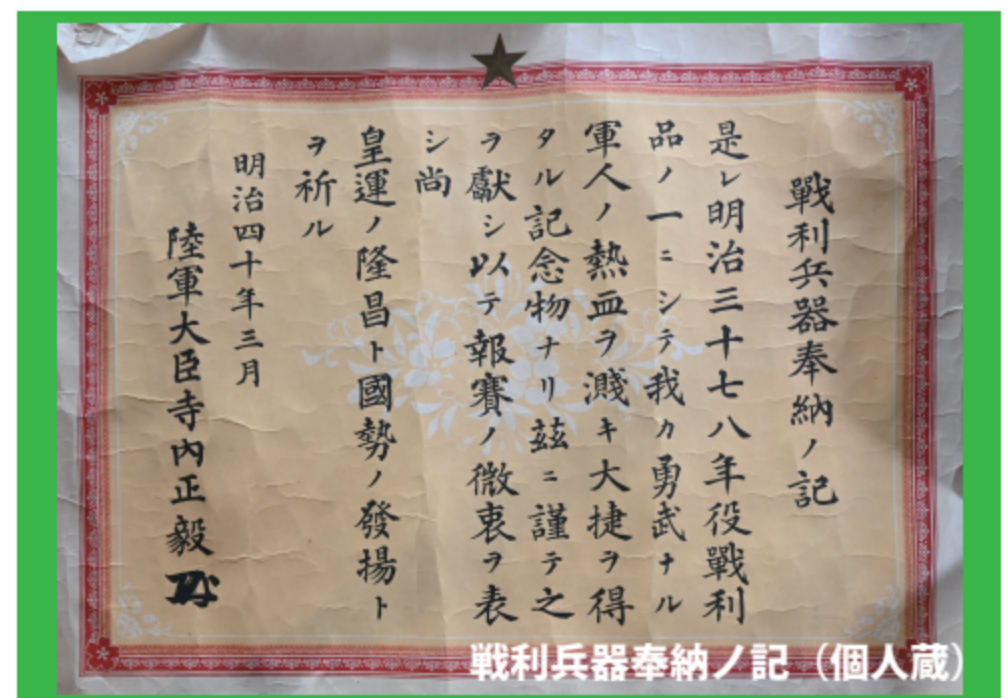
このように大正期までの日本は戦争に勝利することで国際的地位を高めていくのですが、その結果昭和期に入ると

極端に軍事に偏り、中国大陆への進出に方針を転換していってしまうのです。

Ⅳ 戦争を伝える 現代に伝えられた戦争資料

戦後 80 年の今日においても、地域に残る史料を丹念に調べていけば、近代以降の戦争を物語る史料を幾つも拾い出すことができます。ここでは、それらの史料から見えてきた戦争の姿をご紹介します。

はじめに、当館や日出町役場、大分県護国神社にある戦没者名簿や忠魂碑（招魂碑）などを調査したところ、日清戦争よりも日露戦争の方が戦没者の数が圧倒的に多いことが確認されました。これは、日清戦争に比べて日露戦争への国民の動員数をはるかに多く、陸軍・海軍共に大規模な戦闘がロシアとの間で展開されていたことに起因するものと思われます。また、日露戦争では兵器の高性能化によって戦死者や負傷者の数が著しく増加したとされています。次に、町内にある神社には日露戦争でロシア軍が放った砲弾が遺されていました。これは、陸軍省が戦利品として収集した兵器類を、選ばれた全国約 2 万もの神社に奉納したものです。同社には目録のとおり 4 点の砲弾が大切に納められていました。当時使われていた砲弾が実際にはどのようなものだったのか、その実物を直接みることができるということは、日露戦争を考える上でも貴重なことと思われま



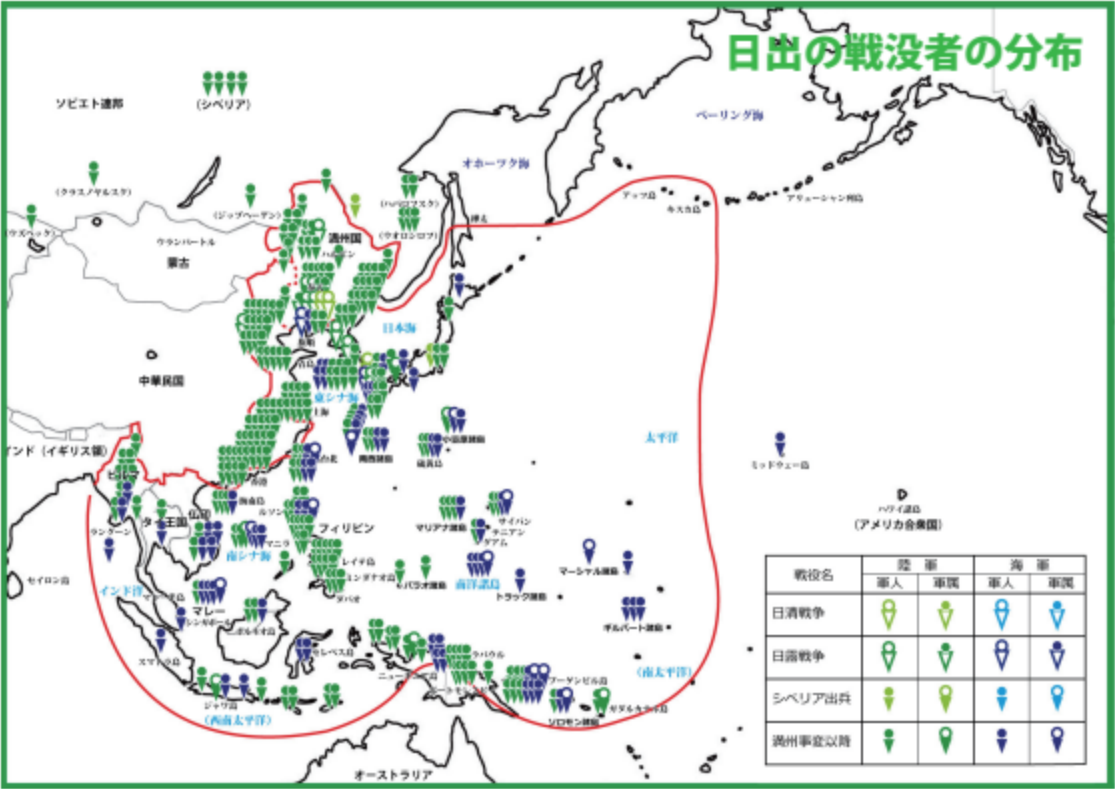
さらに、日中戦争関係地図からは、開戦時から次第に戦争が拡大していく様子を明確に読み解くことができます。また、戦前期の日出町報からは、戦争前夜の社会情勢を読み解くことができます。

V 戦没者を弔う

戦没者の数と分布

近代日本の戦没者（軍人・軍属）は日中戦争（支那事変、昭和 12 年）以降、太平洋戦争の終戦（昭和 20 年 9 月）までおよそ 230 万人にのぼり、うち 210 万人が国外で戦死（戦傷死・戦病死を含む）したとされています。それ以前の国内外の戦役（西南戦争、日清・日露戦争ほか）を加算すると、その数は数万、十数万人とさらに膨らみます。

では、近代日岬（旧南端村・豊岡町・日岬町・藤原村・川崎村・大神村）の戦没者はどれほどの数で、いつ、どこで戦死したのでしょうか。これを知る手がかりとして、日岬町（旧町村含む）が作成した『戦没者台帳（遺族名簿）』や各地区（旧町村）に営まれた「忠魂碑」（戦没者慰霊碑）の戦没者銘（石碑・石柱、銅銘板）、その他靖国神社、大分県護国神社の史料などが挙げられます。これらの情報から推定される戦没者の総数はおよそ 900 名以上、1,000 名におよぶ規模であったとみられます。佐賀の乱を端緒に西南戦争、日清・日露戦争、日中戦争と数を増し、太



平洋戦争末期に激増しました。終戦（昭和 20 年 8 月～9 月）を迎えてもなお、敵国に抑留されるなどして戦後に命を落とした戦没者は少なくはなかったのです。

このように戦没者の数と分布を調べていくと、故郷から遠く離れた中国や朝鮮半島、ソ連、東南アジア、南・東太平洋の島々と、その場所が極めて広範におよぶことに改めて驚かされます。

戦没者の慰霊

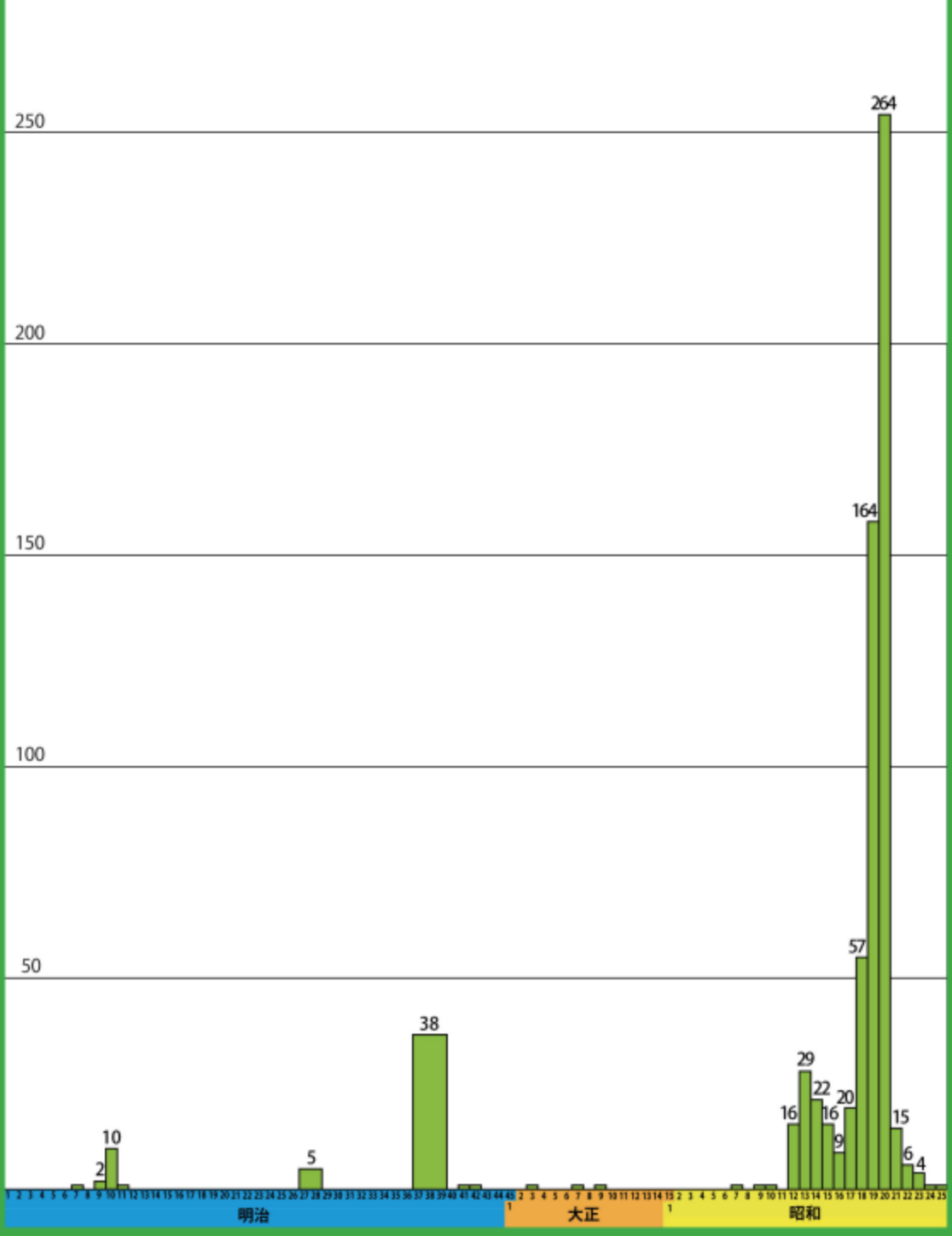
戦争で命を落とした戦没者の慰霊の地として、東京の靖国神社をはじめ、全国各地に創建された護国神社が広く知られています。両社には日岬の戦没者も祀られています。彼らの郷里にも慰霊の地として「忠魂碑」が建立されました。毎年 4 月下旬から 5 月上旬、忠魂碑の前で町村主催の招魂祭（慰霊祭）が神式ないし仏式で執り行われました。

日岬の忠魂碑は、その多くが明治時代後期（明治 30 年代前半）に建立されました。碑身は自然石のもの（豊岡、日岬、大神）と尖頭角柱の加工石のもの（南端、藤原、川崎）とあり、軍人や学者、神職などの揮毫により国への忠義を尊ぶ慰霊の碑名が刻まれています。

また、戦没者個人を祀る墓も建立されました。尖頭角柱の碑身が近代を通じた特徴で、明治時代の陸海軍の規定に基づきます（形そのものは前近代の神道・儒教の墓に由来）。しかし、その様子は時代によってやや異なり、仏式墓によくみる頭部兜形のものも散見されます。碑正面或いは側面に故人の所属・階級・（勲功）・氏名や戒名を刻み、側面には詳細な経歴（戦歴、戦死の経緯など）も刻まれました。

墓は遺体の葬送とともに建立されるのが通例です。しかし、戦局が複雑かつ激化した太平洋戦争期においては、戦死者の遺体の収容・帰還がままならず、戦禍の国民生活も相まって、遺体なき建墓や、葬送から遅れて戦後しばらくしてからの建墓の例が少なくありません。

日出の戦没者の推移





近代戦争と日出

西暦	和暦	出来事
1867	慶応3	12月9日 王政復古の発令
1868	明治元	1月3～4日 鳥羽・伏見の戦い(戊辰戦争が勃発)
1869	明治2	6月17日 版籍奉還 6月29日 東京九段に招魂社(後の靖国神社)創建
1872	明治5	11月28日 徴兵の詔書及び徴兵告諭(太政官告諭)出る
1873	明治6	1月10日 徴兵令を定める
1874	明治7	2月18日 佐賀の乱にて、上田亀太郎が戦死
1877	明治10	1月30日 西南戦争勃発 4月1～2日 増田末太郎が率いる中津隊が鹿鳴越峠を越えて大分県庁を襲撃
1889	明治22	2月11日 大日本帝国憲法公布。兵役の義務が明文化される
1894	明治27	8月1日 清国に宣戦布告(日清戦争)
1900	明治33	5月 黒岩山上に招魂碑を建立 8月14日 日本軍、各国連合軍と共に北京城内に侵入(北清事変)
1904	明治37	2月10日 ロシアに宣戦布告(日露戦争勃発)
1910	明治43	8月29日 韓国併合
1914	大正3	7月28日 ヨーロッパで第1次世界大戦が勃発 8月23日 ドイツに宣戦布告(第1次世界大戦に参戦)
1915	大正4	1月18日 中華民国に対し、対華21か条の要求を提出
1918	大正7	8月2日 政府、シベリア出兵を宣言 11月11日 ドイツ、休戦協定に調印(第1次世界大戦終結)
1922	大正11	6月24日 政府、シベリア派遣軍撤退を声明 10月25日 シベリア派遣軍、北樺太を除き撤退完了
1928	昭和3	5月3日 日本軍、蒋介石率いる国民革命軍と衝突(済南事件)
1931	昭和6	9月18日 満州事変勃発
1932	昭和7	3月1日 満州国建国
1937	昭和12	7月7日 盧溝橋で日中両軍衝突(日中戦争始まる)
1939	昭和14	5月12日 ノモンハン事件勃発 9月1日 ドイツ、ポーランドに侵入 9月3日 英仏、対独宣戦布告。第2次世界大戦勃発
1940	昭和15	9月27日 日独伊三国同盟調印
1941	昭和16	4月13日 日ソ中立条約、モスクワで調印 12月8日 対米英宣戦布告。太平洋戦争勃発
1945	昭和20	7月25日 航空母艦海鷹、城下海岸に繋留 8月15日 昭和天皇、終戦の詔書放送 9月2日 米軍艦ミズーリ号甲板上にて降伏文書調印

〈参考文献〉辻治六(著)・辻満生(編)『日出年代史(増補)』(辻満生、平成7年)
歴史学研究会『日本史年表 増補版』(岩波書店、平成5年)

【主要展示資料】

I 徴兵制度の成立

『改訂徴兵令(写真パネル)』(現本：国立国会図書館蔵)

『大日本帝国憲法(写真パネル)』(現本：国立公文書館蔵)

II 内戦からはじまる近代戦

『佐賀襟報・佐賀戦記』(大分県立先哲史料館蔵)

『靖国神社忠魂史』(大分県護国神社蔵)

『縣治概略 第六(写真パネル)』(現本：大分県公文書館蔵)

III 対外戦への広がり

「征露紀念盃〈日出町軍人歓迎会〉」(当館蔵)

「明治卅七八年(日露戦争)従軍記章」(当館蔵)

「日本赤十字社特別社員章〈明治21年製〉」(個人蔵)

『日露戦役功賞者調 速見郡』(大分県立先哲史料館蔵)

IV 戦争を伝える

『衛生兵関係資料』(当館蔵)

『日出町報(戦前期)』(当館蔵)

V 戦没者を弔う

戦没者遺族台帳(当館蔵)

軍歴簿(当館蔵)

【展示協力機関】

大分県公文書館 大分県護国神社 大分県立先哲史料館

日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館

【開館時間】9:00～17:00 ※入館は16:30まで

【休館日】月曜日(祝日の場合はその翌日)

年末年始(12月29日～1月3日)

【住所】大分県速見郡日出町2602番地1

【問合せ】TEL0977-72-6100 FAX0977-72-6103

■所管課 日出町教育委員会社会教育課(文化財係)

〒879-1506

大分県速見郡日出町3891番地2

TEL 0977-73-3222 FAX 0977-72-8680